

今週の新刊

はかない命を守り、育てる



岩波書店 / 2300円

今年も桜の開花の話題が新聞を飾る。これほど桜を愛しながら、品種はほとんど染井吉野。しかし、かつて日本には、もっと多種多様な品種があった。阿部菜穂子『チェリー・イングラム』は、日本で消えようとした桜をイギリスで守った園芸

家の生涯を追うノンフィクション。明治、大正期に来日したイングラムは、桜に恋をし、近代化と商業主義の波に絶滅する品種を、かの地で育てた人物だった。彼は富士吉田で新種を発見、浅野内匠頭にちなみ「アサノ」と名付ける。見つけた時、まず彼が思ったのは「この桜をどうしたらイギリスへもっていくこ

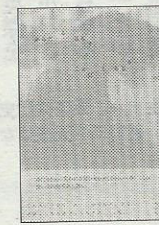
とができるだろうか」だった。日本では失われた心を、我々はイギリス人に教えられる。著者は、イギリス在住の地の利を生かし、関係者に取材。知られざる日英の懸け橋を著した。日本の桜守たちが、戦時中に桜を疎開させた話は感動的。今年の桜はいつもと違って見えるはずである。



角川書店 / 1600円



日経BP社 / 1500円



白水社 / 2000円



西村書店 / 1500円



毎日新聞出版 / 1200円

次々話題作を放つ万城目学の新作長編が『バベル九朔』だ。主人公が作家志望の若者で、ビルの管理人を務めるという設定は、著者の経歴を映す。しかし、その「俺」の前に、全身黒づくめの「カラス女」が現れ、「バベルは壊れかけている」と告げるあたりから、一挙に万城目ワールドが展開していく。「俺」は奇妙な事件に次々と巻き込まれ、やがて世界の一大事に……。『最強の『奇書』誕生！』（帯文）。

あの騒動は何だったのか？ 経営権を巡って父と娘が対立した「大塚家具」は、同族経営の難しさを露呈させた。磯山友幸は、この問題を『理』と『情』の狭間』にあると捉える。裸一貫で「家業」を株式会社開業に育て上げた父が訴える「情」と、新しいスタイルを目指す娘の「理」の衝突。著者はそこに「コーポレートガバナンス（企業統治）」の変化を見だし、大塚久美子社長の主張と本音を聞き出す。

静かなタッチと、きめ細かな描写で高齢男性にもファンが多い石田千。『からだとはなす、ことばとおどる』は、「ふれる」「ふりむく」「まつ」「ねる」など身体感覚を伴う動詞をテーマに、町を歩き、触れ合った人や風景を、ていねいに描いていく。「きる」にある「はだか」で泣くと、とても軽い。赤ん坊というのは、もっとも勇敢な生きものだな」は、山の温泉につかりながらの感想。随所に挟まるモノクロ写真もいい。

フィンランドの作家、エリカ・イタラタによる『水の継承者 ノリア』（末延弘子訳）は要約が難しいデリストピア小説。軍に占領された北欧の村に住む少女・ノリアは、茶人の父から「茶」の心と、秘密の泉の在り処を受け継ぎ、守ってきた。父の死後、軍の検閲を逃れ、水を運ぶノリア。しかし、やがて……。水と人間の深い関係を、静かな緊迫感を保ちつつ、著者は祈るように言葉をつづる。本作は映画化が決定している。

二人の老人が書いた、老人のための本。名づけて『老人の壁』。不機嫌な年寄りのことは「生年寄り」（養老孟司）と呼ぼう、検索ワードがわからなくて「あの、ほら」と言ってしまうとき、に助けてくれる「アノホラ・ロボット」（南伸坊）があればいいなど、ユーモアがたっぷり。周りの世話になりたくない、申し訳ないと思うよりも、老人は機嫌よくにこにこしていればいい。そうか、それなら楽しいはずだ。